

明治学院大学 心理学部付属研究所 通信

所長挨拶

「あらためて150周年を思う」

2013年は、明治学院にとって創立150周年という記念すべき年でした。1863年（文久3年）に、宣教医として来日したヘボン博士夫妻が横浜で開いた英語塾がルーツとされます。

聖書の教え「他者への貢献（Do for Others）」は、建学の精神として今に伝えられています。眼科を専門としていたヘボン博士は日本の視覚障害者と交流があり、当時築地に開校した盲学校では、聖書の日本語訳をヘボン式ローマ字で表記した凸字本を教科書として使用したそうです。それが日本初の障害児教育用の教科書となりました。

その後の明治学院からは、英語教育の指導者と共に、セツルメント運動や幼児教育で知られる賀川豊彦など、多くの社会活動家を輩出しています。

このような明治学院大学にあって、最も新しい学部である心理学部は、「こころを探り、人を支える」をカリキュラムの基本理念と定め研究・教育をスタートさせ10年が経過しました。文学部心理学科の時代に実習の場として設置された心理臨床センターは、心理学部付属研究所の相談・研究部門として地域貢献を目指しています。また、調査・研究部門は、地域社会の心理的、教育的ニーズに関する調査、学部教員の基礎的研究、外部研究者との共同研究などの推進と調整の役割を担っています。

2014年1月、長年にわたる関係者の協議と国会での議論を経て、日本政府は国連の「障害者の権利条約」を批准しました。障害のある人々の人権保障と社会参加の進展が期待できますが、地域社会の理解とインクルーシブな教育システムの構築が不可欠です。心理学研究においては、ユニバーサルデザインに基づく教授学習過程の再検討が迫られてもいるのです。150年を経て、「歴史を活かし、未来を築く」掲げる明治学院にあって、私たち心理学部付属研究所もまた、新たな課題への挑戦が求められています。

心理学部長・心理学部付属研究所長 金子 健

研究所各部門主任挨拶

調査・研究部門

心理学部付属研究所の地域貢献を探るべく昨年度から取り組んでいる特別研究プロジェクトでは、先駆的な機関と並行して、高輪地区の乳幼児施設から中高生施設、さらには高齢者施設等へのヒヤリング調査を実施してきたことにより、当研究所に対する支援や連携のニーズが少し見えるようになってきました。また、明治学院創立150周年を記念した公開セミナーや特別講演会を行い、心理学の基礎的分野に対する興味・関心も高いことが分かりました。一方、心理学部の若手研究者を中心とした大学内外の研究者との共同研究への助成にも力を入れてきています。これらの当研究所の事業について、その内容をこれまで以上に詳細に研究所年報において紹介し、調査・研究部門の活動内容について多くの方々からご意見を頂き、付属研究所の11年目のステップとしていきたいと思っています。

調査・研究部門主任 藤崎 真知代

相談・研究部門

心理士の国家資格化が近々の課題となるなか、相談・研究部門（心理臨床センター）の存在意義はますます重要なものとなりつつあります。当センターを訪れるクライアントは発達に問題を持つ子どもたちと、対人関係を中心としたこころの葛藤を持つ人たちに二分されます。人はこの世に生まれ、大地に戻るまで、数知れないこころの危機に遭遇します。人のこころを、脳と環境が織り成す布置と考えれば、こころの障害の要因がより脳にあるのが発達の問題であるし、より環境にあるのが葛藤であると推測されます。要因がどこにあるにしろ、カウンセラーは、クライアントにみられるこころの問題の襞を一つ一つ丁寧に紡ぎなら、脳であるなら、その人が社会の中でより生きやすくなるように脳に信号を送り続け、葛藤であるなら、その葛藤を整理し解決して、社会の中で安心して生活できるよう支援します。文章にしてしまえば単純のように聞こえますが、人はみな固有のこころを持っているため、毎日毎日が応用問題であり、こころのなぞ解きの作業といえると思います。

相談・研究部門主任 阿部 裕

2013年度 特別研究プロジェクト

- テーマ **心理学部附属研究所の近隣地域における実践的地域包括ケアシステムに関する探索的研究**
- 研究代表者 **金子 健** (心理学部附属研究所長)
- 研究構成員 **藤崎 真知代** (調査・研究部門主任)、**清水 良三** (教授)、**伊藤 拓** (准教授)、**横澤 直文** (助手)

昨年度に引き続き、行政への提言および協働の可能性を探索するために、近隣地域の地域生活支援センター、幼稚園、療育施設、児童館、私設認可保育所、中高生プラザなどの諸施設に対してインタビューによるニーズ調査を行った。その結果、以下の3分野において心理的支援ニーズが高いことが明らかになった。

① 精神障害者に対する偏見低減・QOLの向上

地域生活支援センターに対する調査の結果、精神障害者が徐々に地域に参加出来るようになってきているが、未だに偏見はあり、当事者達の日常生活に影響を及ぼしていることが明らかになった。今後は同施設と協働し、偏見低減を目的としたプログラムを今年度末から来年度にかけて実施していく予定である。また、当事者のQOLの向上を目的とした集団プログラムも当研究所スタッフが同施設に定期的に出向き、実施する予定である。

② 発達に偏りのある子どもに対する支援

幼稚園、療育施設、児童館、私設認可保育所に対する調査の結果、当研究所から物理的にやや距離のある地域が最もニーズが高いことが明らかになった。この結果を踏まえ、当研究所で既に実施している発達相談や集団プログラムが掲載されているパンフレットを各施設に配布した。さらに必要に応じて発達や学習に対するコンサルテーションをアウトリーチ形式で実施していく予定である。

③ 思春期の子どもに対する支援

中高生プラザに対する調査の結果、思春期の子どもや非行傾向にある子どもとの接し方について困難を感じている支援者がいることが明らかになった。今後は、同施設と協働し本学教員がコミュニケーションの取り方についての研修プログラムを実施する予定である。

来年度は上記のプログラムを実施した上で評価を行い、当研究所が地域福祉の構成要素としてどのように機能し得るかを考察し、地域生活における生涯発達を支える現状のシステムを切れ目なく展開させていくために何が必要かなどを行政に提言していきたい。

萌芽研究プロジェクト 1

空間視覚化能力に関する生涯発達の研究

本プロジェクトの目的は認知心理学と数学教育学、両分野から統合的に取り組み、人の3次元構成能力に関与する認知プロセスや発達過程を解明することにつながる成果を提出することである。これに対し人間の空間認知能力について、文献調査により両分野の研究成果や学校教育における取り組み(カリキュラム構成や実際の指導と達成度など)を整理し、考察・検討してきた。その中で学校教育における空間認知に関わる内容が断続的であること、日常経験とのかかわりでこれらにどのような影響があるのかについて検討の余地があること、これに関連して、認知心理学の研究成果が活かされていない現状があること、などが課題として浮かび上がった。これらに対する考察を基に、今後は小学校段階から大学生において空間認知能力の実際を捉える調査を計画・実施し、その発達のプロセスを解明することにつなげていく。

教授 金城 光

萌芽研究プロジェクト 2

感情推論における検索容易性効果の検討

近年の社会的認知研究では、他者の心的状態の推論過程に関して研究が進められている。しかしながら心的状態の中でも感情に焦点化し、さらにその過程を調整する要因に関して検討した研究は少ない。本研究では、対象者の置かれた状況に対する推論者の検索容易性が感情推論過程に及ぼす影響ならびに調整変数に関して検討する。実験では、推論者である実験参加者の過去経験の検索容易性を操作するため、怒り経験あるいは後悔経験を2つ(検索容易条件)もしくは8つ(検索困難条件)想起させた。続けて怒り感情ならびに後悔感情に関連するエピソードを呈示し、登場人物の感情状態を推論させた。検索容易条件の方が検索困難条件よりも、想起した過去経験に関連した感情の推論を行うと予測される。またこの効果は、認知欲求の程度など、参加者の個人差要因によって調整されると考えられる。現在分析中の実験データより、今後これらの予測に関して検討する予定である。

准教授 田中 知恵

萌芽研究プロジェクト 3

「多文化社会型居場所感」尺度とその活用に関する研究

すでにほぼ完成している「居場所感」尺度を使って、浜松市、西東京市、秦野市の日本語教室において、支援者および学習者双方にアンケート調査を実施した。分析の結果、34項目からなる「居場所感」尺度が、信頼性が高く妥当性のあることが立証でき、より緻密な改訂版を作成するための第1回居場所感ワークショップを、8月7日に早稲田大学文学部で行った。そこでは、3都市で行った居場所アンケート調査の結果を持ち寄り、それぞれ地域特性から見た調査結果の報告を行い、日本語教室事業の企画立案や活動の改善に向けて、「居場所感」尺度の調査の活用法、居場所を意識した尺度と日本語教材の活用法の紹介を行った。2014年2月28日には、同様の第2回ワークショップを行い、言語・文化的マイノリティとホスト住民がともに活動する場における「居場所感」を構成する因子および滞在期間や活動のあり様による文化適応の差異を検証する予定である。

教授 阿部 裕

心理学部付属研究所の相談・研究部門である心理臨床センターでは、これまでのプログラムに加えて、新たに「白金会」というプログラムを立ち上げました。

このプログラムは本学大学院卒業後研修として、本学修了生の希望する技法や領域について自主的に意見を出し合い、内容を検討しました。

これまで行った内容として、本学教員による動作法の体験やOBによるロールシャッハテストの講義、フォーカシング体験、発達障害の子どもの事例検討会、発達障害児のペアレント・トレーニングなど様々なことをテーマに開催しました。受講生が全て本学関係者という事もあって柔らかい雰囲気の中、活発な意見交換がされました。受講者からは「現場に即した講義や体験だったので非常に役立った」という意見が聞かれ、講師の側からは「教えることで自分も学び直すことが出来た。久しぶりに後輩と交流を持てたので良かった。」という意見が聞かれました。両者にとって有益なプログラムだったと考えられます。

来年度も相談者のこころの問題に答えられるような高度な専門性を身に付けられるようスタッフ一同努力していきたいと思っております。

《《《《 新任カウンセラー着任のご挨拶 》》》》

相談・研究部門である心理臨床センターのカウンセラーとして着任した深津です。カウンセリングや電話受付、当センターで実習する学生・院生の対応などを担当しています。

臨床心理士の資格を取得して10年が経ち、山口県・広島県・千葉県で、中学校や児童養護施設、精神科病院での臨床心理業務に携わってはきましたが、明治学院大学の卒業生ではないため、今までになく新鮮な気持ちで毎日を過ごしています。白金校舎の風格ある佇まいや銀杏の木を毎日のように見ていると私自身が落ち着くことができ、周辺の環境が個人の心を大きく変化させることを改めて実感しています。心理臨床センターも、周辺地域の皆さまに活用していただきてこそ生かされてきたのでしょうか。今度は私たちが、そうして培っていただいた専門性を発揮して、皆さまが今よりも穏やかな気持ちで生活できるような貢献のあり方を探っていきたいと思っております。

2012年度受付ケース相談分類

相談分類	件数	合計	
社会生活面	職場不適応	10	39
	学校不適応	8	
	対人関係	10	
	家族関係	10	
	夫婦関係	1	
行動面	嗜癖	2	4
	摂食障害	1	
	習癖	1	
身体面	睡眠障害	1	2
	心気症状	1	
精神症状	抑うつ	3	12
	不安	3	
	情緒不安定	2	
	意欲低下	3	
	強迫症状	1	
性格面	同一性	1	1
発達面	知的障害	1	30
	学習障害	1	
	自閉症スペクトラム	24	
	運動発達の遅れ(不器用など)	3	
	言葉の遅れ	1	
その他			9
合計			97

2012年度心理臨床センター利用者数(延べ)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
初回面接	17	8	9	15	1	4	10	5	8	6	5	9	97
継続面接	97	94	104	79	60	96	102	84	98	114	106	126	1160
個人/集団指導	4	5	5	7	0	6	4	6	2	4	5	0	48
心理検査	2	2	3	5	1	3	5	3	0	5	6	1	36
PDDの子ども向けグループプログラム	0	25	34	42	0	26	19	24	26	16	24	27	263
親の会「ゆりの木」	0	11	2	11	0	0	11	0	7	0	8	0	50
余暇活動支援	0	5	2	7	0	3	0	4	2	8	4	3	38
合計	120	150	159	166	62	138	151	126	143	153	158	166	1692



明治学院大学心理臨床センター

学校、対人関係、性格、子育ての悩み・・・
お気軽にご相談ください。

予約電話
03-5421-5444

受付時間
月～土曜日 午前10時～午後6時

ホームページ
<http://psy.meijigakuin.ac.jp/clinic/>

※ホームページからご相談の予約はできません。
お電話のみの受付となります。

セミナー・講演会報告

当研究所では、「心理学部付属研究所主催公開セミナー」として、幅広い分野のセミナーを開催しております。

今年度は毎年夏に行ってきた公開セミナーとは趣向を変えて、「明治学院創立 150 周年記念心理学部付属研究所主催公開セミナー」として 2013 年 10 月から 11 月にかけて「心理学から幸せを考える」というテーマのもとに 3 回の公開セミナーを企画しました。

また、2014 年 1 月には特別講演会として中国同済大学の教授をお招きして講義をして頂きました。

公開セミナー テーマ **心理学から幸せを考える**

親子それぞれの発達から幸せを考える

— 子ども時代の大切な体験とは —



- 開催日 11 月 9 日 [土]
- 講師 本学心理学部教授
藤崎 眞知代

動作がもたらす幸せ

— 臨床動作法の実践から —



- 開催日 11 月 9 日 [土]
- 講師 本学心理学部教授
清水 良三

精神障害のある人・ない人の幸せとは

— スポーツの力を通して —



- 開催日 11 月 16 日 [土]
- 講師 公益社団法人
日本精神保健福祉連盟
常務理事 精神科医
大西 守

ブリーフセラピーから「幸せ」を考える

— 「幸せ」という現実はどうのように構成されるのか —



- 開催日 11 月 16 日 [土]
- 講師 本学心理学部准教授
岡田 和久

特別講演会 テーマ **「中国の伝統医学」と現代精神医学との接点**



- 開催日 2014 年 1 月 25 日 [土]
- 講師 中国同済大学文学部教授
精神科医
趙 旭東 (ザオ シュドン)



● 総評

公開セミナー第 1 回目は台風 26 号の影響で中止せざるを得ず、受講を希望された方々だけでなく講師の先生方にもご迷惑をおかけすることになりましたこと、この場を借りてお詫び申し上げます。その後の 2 回については、「幸せ」について親子関係、身体の動き、スポーツ、ブリーフセラピーといった切り口からの講演内容や質問紙、ディスカッション等のワークに対して、大変興味深かったとの感想や続編を希望されるご意見を多数頂きました。

特別講演会に関しては心理職の方に限らず、医師、看護師、留学生など様々な職種の方にご参加頂きました。質疑応答では英語、中国語、ドイツ語での質問が飛び交うなど、国際色豊かな講演会となり、心理学への興味が深まったとの感想のほか、上記の公開セミナーと同様に続編を希望されるご意見も頂きました。

これらのご意見を参考に、引き続き心理学の基礎から応用・実践の現代的なトピックを取り上げて当研究所の公開セミナーを発展させていきたいと思っています。次回以降も多くの方々のご参加をお待ちしております。